

性差の違いによる立礼動作の好ましきに関する研究

長崎県立大学 シーボルト校 情報メディア学科 齋田 千優

1. まえがき

男女差別に対する意識も変化してきた今日、「男らしさ」「女らしさ」といった概念は、未だ社会に深く根付いており、それは礼義の面でも見られる。お辞儀は礼儀作法の一領域として研究されているが[1]、受ける印象を定量的に測った研究は少ない。諫山は、女性の立礼動作の好みを、お辞儀の動作とその時間の観点から研究した[2]。本論文では中性、女性、男性の3種類のお辞儀を比べ、性差によって印象の違いが生じるのかを検証した。

2. 好み判定法

本論文では3種類の性別ごとに最も好ましいと感じられる立礼動作を調べる必要がある。多くの動作の中から最も好ましいものを選ぶことは困難であるが、2つの動作を比較判断する事は、前者に比べて容易である。

性別の最も好ましい立礼を判断するために「好み判定法」を用いる。時間の値を変化させた動作(「刺激」と呼ぶ)を7種用意し、小さな方から順に、刺激1, 刺激2, 刺激3, 刺激4, 刺激5, 刺激6, 刺激7と呼ぶ。本論文で提案する好み判定法の手順を(1)~(6)に示す。

- (1) 刺激2と刺激6を比較評価、好みの刺激を選択。
- (2) 好みの刺激と、刺激対の中点を新たな比較対象とする。
- (3) 刺激対の比較評価を行い、好みの刺激を選択する。
- (4) 刺激対が隣接するまで、(2)と(3)の手順を繰り返す。
- (5) 最適な刺激が刺激2に決定した場合、刺激1を最終的な比較対象とし、刺激6に決定した場合、刺激7を最終的な比較対象とする。
- (6) 刺激対の比較を行い、最も好みの刺激を決定する。

3. システムで扱う立礼

3.1 立礼の動作の設定

立礼の動作を大きく3つに分けた場合、直立した状態から上体を前傾させる動作を屈曲動作、上体を倒した状態で制止する動作を停止動作、上体を倒した状態から直立状態に戻る動作を伸長動作と呼称する。

3.2 挙動時間の設定

屈曲動作、停止動作、伸長動作の各動作の挙動時間を0.5, 1.0, 1.5, 2.0, 2.5, 3.0, 3.5秒の7種とした。これにより、1つの性別につき343種類の立礼の動作を比較評価の対象とすることが出来る。本論文では、実験の結果判明した最も好ましい挙動時間のことを最適挙動時間と呼ぶ。

3.3 CGアニメーションによる再現

被験者に立礼の動作を比較評価してもらう際に、CGアニメーションを用いた。再現する立礼は、4.1で述べた基本姿勢を考慮して作成し、性別にそれぞれ343種類ずつ用意した。基本姿勢はどの性別でも同じとし、各挙動時間の値のみを変化させた。屈曲角度は、最も基本的な立礼である敬礼を再現するために、約30度とした。

4. 検証システム

インターネット上で利用できるシステムを利用した。HTML言語とJavaScript言語を用いて作成し、被験者にはブラウザ上で比較評価をしてもらった。

屈曲動作、停止動作、伸長動作の順で続けて判定を行い、屈曲動作の最適挙動時間が決定したなら、屈曲動作の最適挙動時間を反映させた状態で、次の停止動作の最適挙動時間を判定する。停止動作の判定から伸長動作の判定に移行する場合も同様である。



図1 システムの表示例

5. 検証

5.1 検証環境

被験者は、20代前半の女性17名、男性3人の計20名である。

被験者にはまず、中性の人体模型を判定してもらう。これは、後に行う女性と男性の人体模型を判定してもらう際に抵抗無く判定を行えるようにするためである。また被験者を、A、Bグループに分け、女性と男性を評価する順番を逆にして統計を取る。これは、先に見た異性の立礼によって次に見る性別の評価に影響を与えることがあるのかを調べるためである。

5.2 アンケート内容

アンケート項目は、表1のとおりである。

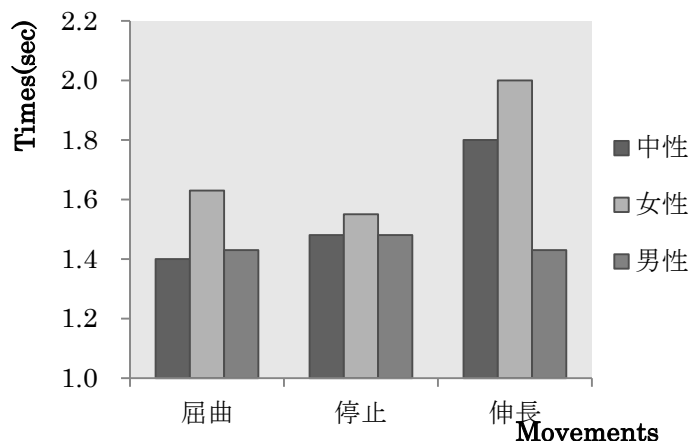
表1 アンケート項目

番号	評価内容
1	最も好ましいとされた結果を、空欄に記入して下さい。 中性 () 女性 () 男性 ()
2	最も好ましいとされた結果に満足したか。次の4段階で評価し、空欄に番号を書いて下さい。 1. 満足 2. おおかた満足 3. やや不満 4. 不満
3	気付いた点や感想などを、自由にお書き下さい。

5.3 アンケート結果と考察

項目1で得た性別と各動作の最適挙動時間の平均値を図2に示す。性別に見た場合、立礼動作全体の最適挙動時間の平均が最も長かったのは女性で5.2秒、次いで中性が4.7秒、最も短かったのは男性で4.3秒であった。

また、どの動作でも女性の最適挙動時間が最も長くなっており、特に伸長動作の値が著しく大きい。一方男性はどの動作でも最適挙動時間が短めで、各動作同士の時間も大差が無い。中性は、全体の最適挙動時間において両性の中間に近い値を取った。図2の結果から、立礼動作において性差によって印象に違いが生じるということが言える。



6. あとがき

本論文では、性差の違いによる立礼動作の好ましさに関して研究した。3種類の性別に同様のお辞儀を再現させ、好み判定法を用いて2つずつの立礼動作を見比べることで、性別ごとの最も好ましい立礼動作を判定した。

性別によってグラフの形や最適挙動時間の長さの違いが大きく生じ、ここに性差があることを証明することができた。

参考文献

- [1]山内兄人：女と男の人間科学，コロナ社，ヒューマンサイエンスシリーズ，2004.
- [2]諫山日奈子：立ち居振る舞いにおける好み判定システムに関する研究 - 立礼を例として - ，出典，pp.7-19，2009.